



湖北のオコナイ

湖北地方、つまり国鉄米原駅近くを流れる天野川流域以北の坂田郡・長浜市・東浅井郡・伊香郡の1市3郡には、毎年1月から3月にかけてオコナイという民俗行事がほとんどの村むらで行われています。オコナイは近畿地方・中国地方・中部地方に広く行われている民俗行事なのですが、湖北地方にその中心があると思われるほど盛んに行われてきました。

オコナイの意味

オコナイということばは、現在では人間のすべての行為をさすことばですが、民俗行事としてのオコナイは特別の意味をもっていま

す。

湖北地方では、「^{しんじ}神事」と書いてオコナイと訓ませていることが多いのですが、実はむしろ逆に仏教的な「修行」や「行法」の意味をもっています。簡単にいいますと、正月のオコナイは「^{しゅうせい}修正のオコナイ」のことで、有名な東大寺の「お水取り」など今でも仏教寺院が年頭に行っている「^{しゅうせい}修正会」や「^{しゅうに}修二会」と共通している行事です。

「今昔物語」などの平安時代の書物には、山里の寺々で村人たちが修正のオコナイの導師として僧を招き多くの餅を与えたことや造花を飾って豊作を祈ったことなどが記されてい



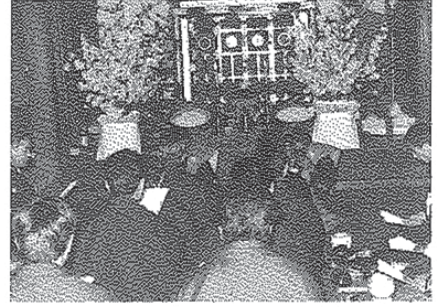
川道神社に供えられた鏡餅



中村の薬師堂(8日朝)(杉野)



「しゅうし」の玉鬮が当たった(杉野)



薬師堂での「しゅうし」(杉野)

ます。

修正会・修二会は奈良時代末期ごろから始められたらしいのですが、修正会・修二会が全く純粋な外来の仏教儀礼であったら、平安初期までに山里の寺々に普及することはなかったと思われます。むしろ、もともと村人たちが年頭に行ってきた行事に仏教的要素が習合したものと考えられます。そして、オコナイは村人たちの確固としたまつりの組織(宮座・寺座)によって行われた年頭行事であるところに特色があります。

湖北地方における分布状況

湖北地方のほとんどの村むらでオコナイがあるといいましたが、すでに消滅しているところもあります。長浜市の旧市街地区、米原町のうち旧醒井村、旧息郷村の彦根市寄りの地域にはありません。伊香郡では、余呉町中河内・中之郷・下余呉・西浅井町菅浦・八田部・塩津浜などはありません。しかし、これらの村むらにもかつては行われていたものがいつか消滅したものです。

また、分布について注目すべきことは、1つの村(大字)に1つのオコナイがあるとは限らないことです。1つの村の中でいくつかの組に分かれてする場合も多いのですが、1つの村の中にあるいくつかの神社や仏堂でそれぞれオコナイをする場合もあります。木之本町木之本では、氏神さん・地藏さん・秋葉さん・観音さん・天神さん・稲荷さんなどで、高月町高月では、氏神さん・観音さん・薬師さん・毘沙門さん・稲荷さん・天神さん・竜神さんなどで行われていて、まさにオコナイ

の町の観がするほどです。このほかにも1つの村で2つ以上のオコナイをする例は多いのです。

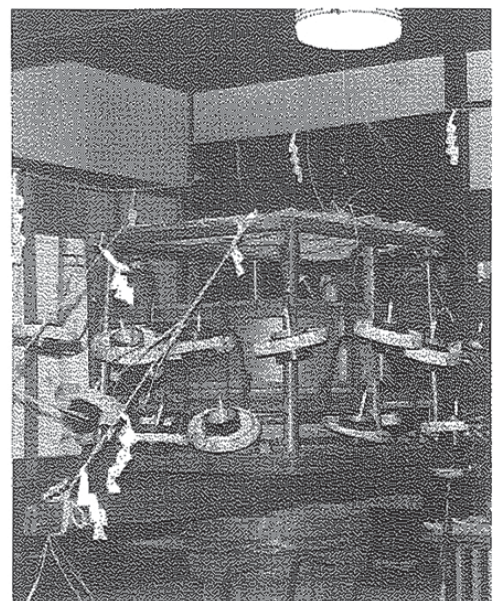
オコナイが湖北に周密な理由

オコナイの中心が湖北にあると思われるほど周密な分布がみられる理由はまだよくわかっていませんが、すこし考えてみましょう。

まず第一に考えられることは湖北の風土です。天野川筋は政治的・経済的・文化的・気候的・民俗的に、湖北と湖東をへだてる境界をなしており、いわば風土的フォッサ・マグナといえます。奥深い山々と湖に囲まれ、多雨湿潤で雪も多く、陰湿なものをさえ感じさせる風土が、わが国の伝統を受継がせたのではないのでしょうか。

つぎに、湖北の信仰の篤さです。平安初期の延喜式神名帳に記されている由緒ある式内社は坂田郡5座、浅井郡14座、とくに伊香郡

は54座の多きにのほっています。また、古代より旧仏教の大寺院が建立され、そのほとんどは



鏡餅をのせる御輿(川道)

戦国時代に兵火にかかって焼失したけれども、それら廃寺の古仏は庶民の手によって守られてき、オコナイの対象ともなっています。このような神への信仰や仏教信仰の重厚さが、神仏習合によってオコナイを今日に伝えているのでしょう。

もう1つ考えられるのは彦根藩の政策です。湖北は彦根藩北筋奉行の配下でしたが、湖北は多くの藩領が入組んだ地方であり、民俗行事についても特別の配慮をしたと思われるふしがあります。びわ町難波の鍛冶組や高月町東阿閉の大組・中組などのオコナイ組にそれをうかがうことができます。彦根藩主の鬼門除けのためという伝承が生まれたのもそのせいかもしれません。

湖北のオコナイの特徴

湖北のオコナイは、神事であり「宮オコナイ」が特徴だという人がありますが、これは誤りです。薬師堂・観音堂・地藏堂・大日堂・阿弥陀堂などを舞台に行われるものが多いですし、僧が関与し、読経する例もかなりあるのです。

湖北のオコナイでは、「まいだま」をつくる場所が多いのも特徴の1つです。これは「まゆだま」ともいい、養蚕地帯だからという説もありますが、豊作を祈願した「米玉」と考

えるのがよいようです。オコナイは、祖霊の象徴である鏡餅を中心とする祖霊祭祀であるとともに、米玉によって豊作を祈願する農耕儀礼でもあるのです。

また、余呉町の丹生川沿いの村むらでは、「射礼」(弓打式・弓射式・弓始式・的祝)が行われます。これは悪魔払いの儀礼です。

余呉町国安、西浅井町集福寺、木之本町西山、黒田、高月町高野、洞戸などでは「ごおう」(牛玉)があります。これは神霊の依代であり、式のあと牛玉杖をもらって帰り田の水口に立てます。これも豊作を祈る咒術です。余呉町上丹生では、丹生川の清水と旧社地の赤土をねって氏子の額へ捺す風習がありますが、これは修正会で牛玉宝印を額に捺すことと類似しています。

木之本町杉野のオコナイ

杉野には、上村・中村・向村の3つの村があり、それぞれにオコナイがあります。それぞれの組織や行事は大体において同じですが、多少のちがいもあります。とくに中村のオコナイは1月8日早朝4時ごろ南北両組が参詣し、薬師堂の前まで双方がきて「神儀合」ということをします。まず先頭の高張提灯の者が5、6歩進み2人が顔見合わせて笑った方が負けとなります。次に当屋の老父が餅を入れ



桜の造花 (杉野)



「神儀合」の道化 (杉野)



鏡つき (杉野)

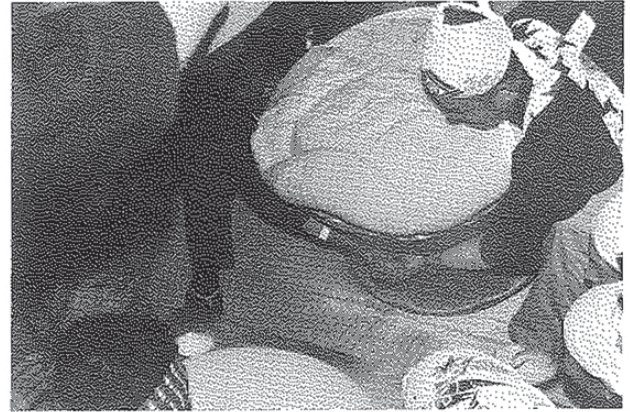
た大きなかますを負っていて、これも同じにします。次に当屋2人が羽織袴でお神酒を両手に持って見合います。次に餅で、肩にのせて双方から1人ずつ出ます。次に花、2人が1本ずつの大きな桜の造花を持ち、前後に振って2本の花がふれるようにします。最後に当屋の一番親類が道化をします。そのときどきのトピックを折込んで面白い所作をして笑わせます。これがすむと男の人は松明に火をつけて薬師堂の中に入り、太鼓を持った青年2人のまわりを土足で走りまわります。「もえた、もえた、もえてっぼうのはんじきじゃ」と唱えて走るのです。夜まだ明けきらぬ薬師堂の中での松明の乱舞は悪魔も退散せずにはいられないでしょう。8日午後1時同じ薬師堂で「しゅうし」という座があり、南北両座より謡が奉納され、来年の当屋を決める玉鬮があります。この「しゅうし」も修正会から転訛したものだという説があります。

びわ町川道のオコナイ

川道のオコナイは、湖北のオコナイの最後を飾るかのように組織・行事とも規模の大き



川道神社でのオコナイ式典



鏡餅のつき上がり（川道）

い行事です。川道では7つのオコナイ組に分かれていて、それぞれの組の当番を中心にオコナイがつとめられます。2月20日に当番の家ですすはき、23日から白洗い、玄米つき、粉ひきなどの準備にかかり、25日に精米、27日に14才以上の男子(長男。女子は参加できません)が当番の家に集まり、1個1俵の大鏡餅をつき、28日の宵宮は徹夜で酒盛りをし、お鏡をおまつりするのです。3月1日の本日早朝鐘を合図に7つの組からお鏡の御輿が神社に向います。晴着の氏子が行列して氏神に参拝し、式典を行います。このあと鏡下げ、鏡割りをし、氏子に配ります。2日はしまい行事で本膳による慰労会があります。昭和36年に青年団が中心となって改革し、やゝ簡素化されました。

川道のオコナイがすむと、湖北に春が訪れてくるといわれます。

以上、湖北のオコナイについて、そのあらましをのべ、具体例についても若干ふれました。湖北のオコナイといっても、どの村の行事もみな特徴があり、内容にも相違ができています。オコナイなどの正月行事は、1年のもっとも重要な折目、筋目として、1年の幸福を祈願する咒術が集中し、複雑な民俗信仰が習合されています。古代以来の祖先の心、庶民の心がこの行事の中に流れているのです。近年非常に簡素化され、すたれ始めているのは本当に残念なことです。このすばらしい文化遺産をなんとかして守りたいものです。

(伊香高等学校 中沢成晃氏提供)